

## 議員のひとりごと

### 議員報酬は必要か否か？

このようなテーマを掲げると、どうせ議員の考えることだから自己弁護に終始するに違いない、では眉にツバをつけて読むとしよう、となるかもしれない。そう受け止められても致し方ない面もあるが、議員は果たして必要か、議会はなくしてはならない存在か、こういったことと合わせ考えていくべきことと思う。

議会と対を為すのが行政であり、議員と同じように選挙で選ばれた村長が運営している。常勤であり大勢の職員と同様に丸一日仕事をしている。このためか村長の報酬についてはほとんど問題視されることがない。議員の場合、年 4 回の定例会、必要に応じて開かれる臨時会、これらが主な仕



事で他に議会内の各種委員会、条例で定める行政の各種委員会がある。全部合わせても年 30 日にも満たない。それでいて月々報酬とは、といった方向へ議論の矛先は向かっていく。

それでは日当制にしたらどうか、という意見がある。現に少数ではあるが、そのような地方議会がある。しかしこれもおかしい話で議員は議会のあるときだけ活動しているのではない。住民と触れる日常活動は欠かせないし、行政とほどよい緊張関係を保つには常に勉強していかなければいけない。

これに対して、大義名分を掲げて使命感を持って議員になったはずでそれくらいボランティアでやれ、との声が出そう。確かに一理ある。だけど現実には霞を食べては生きていけないし、そうした場合、経済的に余裕のある人、会社経営者や自営業者しか議員になれない。これでは若い人が排除される確率が高くなる。若い人が立候補しない理由に、あんな安い報酬では生活出来っこないじゃないか、という話はよく聞く。

やはり住民としても議員としてふさわしい人に活動してほしいだろうし、経済的な理由で出馬を断念してしまうのは地域全体の利益からして不幸なことではないだろうか？経済的ハンディをとっばらってできるだけ多くの候補者が名乗りを上げ、住民にとって選択肢が増えることは議会の質の向上の第一歩とっていい。

議会の存在意義を考えてみると、人の歴史を紐とけば一握りの権力者(国王、皇帝など)が国を治めるやり方(行政にあたる)は世界共通で、極めてありふれていて制度としてほとんど価値がない。権力は腐敗する。絶対的権力は絶対に腐敗する、という箴言しんげんがあるが、人は何でも思いどおりになると横暴になることが経験則上知られている。

これに対しては当人が死ぬのを待つか、反乱を起こすかとなる。しかしその後よくなることの保証はない。最初はよくてもたいがいは元の本阿弥となる。こういった状況で希に権力をチェックすればいいじゃないか、という考えが生まれ、出来上がったのが議会の沿革である。議会の存立の根底にあるのは法と議論が保証されていることである。

要するに私の言いたいことは行政は必然的なものだが、議会はある一定の条件が整った場合しか生まれ得ない希有な存在だということだ。現に世界には議会のない国が多い。だから議会なしに国を運営していくことはできる。が、その結果どういうことが起きるかは歴史が証明している。

今の地方自治の制度は戦後に産声を揚げた。これは日本が戦争に突入し惨めな敗戦みじの憂き目に逢ったのは議会制民主主義がしっかり根付いていなかったからだ、というにがい思いが出発点になっている。

地方自治は民主主義の学校である、と言われている。国政となると難しい専門用語が飛び交い縁遠いものであるが、自分たちの身近な村はどうなるのか、村をどのようにしたらいいのか、これは即、生活

に直結する問題であり、みなさん大いに関心があるはずである。私たち一人一人がしっかりした見識を持ち発言し行動を起こしていけば健全な理想の村に一步一步近付いていき、これが全国的規模で展開されれば国は揺ぎないものとなる。

